

真生

第六卷 第二號

□私は宇宙の本源より来る。宇宙を離れては私は無く、私は宇宙そのもの、現れである。何となれば萬法を離れて宇宙なく、宇宙を離れて萬法はないからである。然らば萬法の一員たる私は亦萬法の本源たる宇宙と其の源を一にするものと云はねばならぬ。

□されば私の生命が宇宙の生命と一なる限り、私の生命は宇宙と共に一體であり、萬法と共に不滅である。従つて私の身心がたさい如何やうに變らうとも、それは私の身心の姿の變化に過ぎないのであつて、私そのものの變化ではない、私の生命は宇宙と共に不滅であり、萬法と共に常住である。

□この自覺、これが私の入信の初めであつた。而も、私は、宇宙の宏大にして無邊である又宇宙一切の現象が時空に渡つて相關なるも皆過ぎの一つであつた。而も其の變化たるや實に驚くべき宇宙大生命の進展であつて天體の運行、四季の變化、萬物の生滅、起滅、一として其の道によらざるはなく又一として其の力によらないものもないことを知つてゐた。

□然し乍ら、宇宙の生命と自分の生命とが本來一であること云ふことを悟つたのはこの時が初めてである。而もこの時、私は宇宙生命の現はれとして、宇宙の絶大なる力と法則と其の恵みとの中に眞實の自己を永劫に見出した。

□宇宙と萬法とは一體であり、萬法と私は相離し、萬物と私は同體である。されば私は一切を此の宇宙の生命に託し、其の中に於て、自分のできる最高の力を以て、自ら信ずる宇宙最高の眞實の世界に自らを生かすことが第一である。(念)

目次

- ◇新しい如來さま…………… 辻 子
- ◇生ける人々…………… 土屋 觀道
- ◇無駄なき生活…………… 山口 常照
- ◇吾朋便り……………
- ◇眞生同盟清水支部眞生修養會結集芳名……………
- ◇傳道日割……………
- ◇編輯部より……………

新し如來さま

◇私は今迄、子供を育てるのにも、所謂「自分の子供」を育てるやうな気がして、吐く時にもビシ／＼と吐つて来ました。けれどよく考へてみると、本當に「自分の子」か知らぬといふ氣が溢々して来るやうになりました。

◇成る程、直接生んだのは私達でありませう、だから此點からは親だといふ權限があるかも知れません。而し本當のころ私達でも、さうさもある事の出來ぬ個性をちやんと持つて來て居ります、そして其特異性がたんだん伸びてゆくやうであります。「親の力」といひますが、親の力でも押し潰すことの出來ぬ程「彼自身」が發展して行きます。

◇これを見るに私達は親だといふが、矢張り表面的な綱がりの一點で親だといふだけで、根本は彼も如來さまの地から生れ上つた生命であり、私も如來さまのみ體から生れ上つた一つの生命であつて、各々獨立した如來の芽であります、そこに上下、老少、長幼の距たりがありません。

◇「私の子」だなんぞ偉そうなことを云つてゐるが、さうに「私の」といふ所有權があるのでせう、さうに私に丈偉いところがあるのでせう、親だけが一人勝手で「自分のもの」だと決めてゐるが、その脇の下から子供は潜り出て、「それ自らの天地」へぐん／＼と成長して行つて居ります。これを思ふと、三つ四つの茶目坊にも、心から「新しい如來さま」として仕へずには居れません。

◇本當に一切は「新しい如來さま」として、一本の大根、一つの茶碗に至るまで、皆如來さまの如是力、如是性を内蔵して居ります、いや如來さま御自身なんでありませう。

◇不當によく見るに、總てのものは皆／＼と生き生きて行つて居ります、そして私自身も亦永遠に生かされてゆくんだと信ぜずには居られません。(辻子)

▽私達のやうな者の中からも、お念佛の心が光さすといふとは、如來さまを驚がかりがある體操であります。

▽私達の奥の方で如來さまの御心が私達へ通ひ、私達の心が如來さまへ通つて居ればこそ如來様の心がお念佛となつて私達の中から噴き騰つて下さいませう。

▽常に怨を離れ、嗔りを離れ、愚痴を離れたいと思つて居り乍ら、いつも怒に燃ち、怒りに驅られ、無智を重ねて居ります。その自分の不甲斐なきを思へば思ふ程、ハッキリした正見正精進の大生活に立ち直りたいと願求せられてなりません、而し願求してゐるのに、願求してゐる下から又失敗を重ねてゆきます。本當に自分の淺ましき、弱きをつゝ／＼と痛感せずには居られません。

▽この高く理想を求める心、これこそ如來さまが私達の内へ潜つて來て、求めさせて下さる心であります。そして現實の自己を顧みて此矛盾に泣き、新しで開ひに出でる心、此力こそ如來さまが私達へ力となつて立ち給ふ御姿であります。

▽この如來有ればこそ、血の出るやうな悩みの中にも、利々／＼新しい望みの世界に生きて向上して行くことが出来ます。

▽お念佛の有るところに自己も有り、如來さまもあります、お念佛の無い處、自己も無く如來さまもありません。眞に念佛の聲が響きわたつてゐるころ、そこに生きた信仰が動いてゐます。(辻)

生ける人々

土屋 觀道

私の意味する生ける人々は單に飯を食て生きてゐる人々を云ふ意味の人々ではありません。従つて私の意味する生ける人々は單なる生物學的な肉體の生命を云ふのではなくして、永遠に亡びない、價値の生命の人々を云ふのであります。この意味に於て、果して私達は眞に生ける人々でありませうか。

世間の人々は彼のキリストを以て十字架にかゝつて死んだ人だと思つてゐる人々が多いやうであります。然し乍ら彼は果して死んだのでありませうか。バイブルに傳ゆるところでは彼はキリストは自分自身で「我三日にして甦る」と云つたことを云ふことです。そして、彼は果して三日にして甦り、肉身のまゝに天國に昇つたことを言はれてゐます。果して彼がその豫言の通り肉身のまゝで、甦つて昇天したかどうかは暫く別として、若し傳ふるが如く、彼キリスト自身に於て、「我三日にして甦る」と云つたことが事實であるとするならば、彼は確に其の信仰に於て、不死の自覺を持つていたことを云ふことは確であります。然らば彼は果して三日にして此の世に甦つたのでありませうか、若し彼の死を普通の意味から解釋して、生理的に云ふならば今日の科學的頭腦の持主には誰一人彼が十字架にかゝつて死んだことを否定する人はありますまい。そして夫れ以來、キリストが三日にして甦

つたことを誰が承知しうるものでありませう。然し乍ら若し之を精神的に考察し、宗教的に反省して、今一度考へ直して見たならば、彼が三日にして甦つたことを誰が反對しうるものでありませう。否むし彼は十字架に死することによつてこそ、却つて眞に永生の人となつたことを云ふべきではありませんまいか。私はそこに却つて人格の永生を見るものであります。何と云へば彼は十字架にかゝつたことを云ふことは、其の實道の爲めに其の生命を捧げたことでありまして、彼は其の肉を殺して、其の靈に生きたからであります。

肉體の壽命は長くても五十年か百年を超へることができません。然るに靈に生きたことを云ふことは即ち價値に生きたことを云ふことでありまして、價値そのものが已に時間を超え、空間を離れたものでありますから、永劫不死の生命であることも云ふことができるのであります。加之、之を今日の現實生活の上にながめて見ましても彼キリストは尙多くの信者の人々の心の中に生き働いておるのを見ます。否、それどころではありません。彼はむしろ肉身の昔のまゝよりも、更に尊き人格の光りとして、神の光りを信者の心に投げてゐるのを見るのであります。而も此の事實これをしもキリストは尙十字架に死んだことを云ふべきでありませうか。彼が三日にして甦ることを云ふことは此の意味からすれば誠に當然の言葉と云ふべきでありませう。而して此のことは今も尙昔の如く事實であります。キリストが十字架にかゝつた時、多くの弟子たちが世間の輿論を恐れてか、キリストを離れしたことは事實のやうです。否、少くとも當時の模様では多くの人々はキリストの許を離れ

吾朋便り

東京にて 觀道

或る人が私のやうに家もち子もち妻あるものでは無一物の味が判らないと云ふのを聞いて其の人の心のさもしさをあはれに思ひて、家をも妻もち子を持つ我身にも

ミオヤの慈悲は變らざりけり
みほこけの慈悲の光に生くる身は
妻をも子をも佛なりけり
或る人の豫言者内に入らずと云つて、自分の感化が自分の妻子に及び難いを歎くを聞きて、

法の道たどるこの身のまごころを
妻こそ知らめ子こそ知らぬ
人の知るさ知らぬさにかゝわらず、吾人はたゞ自らに行くべき道を行けばよいとの心にて人知るも知らぬも我は知らぬなり
我は行くべき道をこそ行け
我が説く道を邪まする人のあるを見て、何のその捨ておかうぞ法の道
人は人なり我は我なり

大垣市 桑原省三様より
大垣光明眞生會同人一同至極健全にて新年を

迎へ、崩御々當日にも會員一同早朝より圓通寺に集り奉悼念佛會を勤修させて頂きました是が當地奉悼會の最初でありました。

大阪市 古家一男様より
諒闇に應はしい、さうらゝかな新春で御座います、御上人様を初め皆々様には慈光裡に恙なく御越年の遊事と存じます大阪の法友も皆元氣で新しい年を迎えました、本年は御上人の御指導により、層一層大きく努力したい希望を計書と祈りに充されて居ります。

静岡縣焼津町 浅水十明様より
謹啓昨夜は偶然導師の御垂示に列し難有感謝仕候此後共可然御薰陶相成度願上候草々敬具
遇見良師耕心田 結得彌陀本願緣
一夕聽講三身佛 滿載紫帆弘誓船

新潟縣柏崎 會田狂様より
奥様御禮の手紙を今日迄延びました事を深く御詫申す御上人様の御居での内に上げ度いと思ひつゝ今日になりました御伺ひ致しました時はいゝ御親切様に浴し厚く御禮申す御體験を通じていゝ御話し御家庭御日常其儘の御話の中に御上人様が如來サマの御心と全く一つに御成り切り居られる事を深く感じて實に尊く覺へましたと同時に自

て、一時キリストの信者でないかの形をさつたことは事實であります。そして又、キリストが十字架にかゝつた時は多くの人は確にキリストは十字架にかゝつて死んだのだと思つたことではありません。然るにキリストのみはそれを信じませんでした。而して彼は十字架にかゝつたのです。然るに彼の預言は適中して、彼は間もなく、多くの人々の心の中に油然として甦つて来たのであります。オウ何と云ふ偉大なる自覺でありませう。即ち彼は彼を信する人々の心の中に、今更の如く新に甦がへつて来たのであります。いはゞ肉に死した彼キリストは今や正に人類の心の中に永生の相として新に生れて来たのであります。而して今も尚彼は神の姿として信者の中に生き甦いてゐるのであります。

二

この意味に於て、印度に於ける釋尊も亦自ら永生の人であります。彼は已に三千年來、幾多の人々の心を通じて、今も尚昔の如く多くの信者の心の中に生き甦いてゐるのであります。釋尊入滅を聞いて悲しんだのは三千年の昔でありました然し今は却つてそれが私共への教へとなつて、釋尊入滅の御相がそのまゝ、永劫に生ける人々の光りさへ拜せられてゐるのであります。その他、釋尊の誕生、苦行、成道の御相も悉く私共の心の中にはまたさなき眞人の姿となつて、くりかへし、くりかへし、無限の説法を垂れてゐるのを見るのであります。して見れば釋尊の誕生を四月八日とし、その入滅を八十歳となすことも見からざるを眺めればそれそのまゝが、單なる肉體的生理學上の一生にあらずして、本當の意味に於ける釋尊の一大説法として、それそのまゝが、永遠より永遠への人類の心に甦く

生ける相と云ふべきであります。

其他孔子と云ひ、老子と云ひ、或は各宗各派の祖師とも云はれる人々は、多くの場合、今も尚昔の如く多くの人々の心の中に生き甦いてゐるのを見ることができるのであります。然るに私共はかうした意味を其の實今日まで知らなかつたのであります。そしてたゞ此の世に於て、此の世限りのやうな自己のみ眺めて、眞に生くべき永遠の世界を知らなかつたのであります。否、少くとも、私共は之等の偉人を已に過去の人々として、今も尚現に斯くの如く此の世に於て、之等の偉人に接し、之等の偉人と相語ることをできるのを知りませんでした。然し乍ら靜かに人生の眞相を考察して、一度天地宇宙の宏大なるを眺め、人生一生の眞意義を發見して、偉人の風光に接し來る時、之等の偉人は永遠より永遠に幾多の人類の心に現はれ、今も尚幾多の人々に道を説いて活きてゐるのを見るのであります。

この意味から考へるに私共の心は肉に生けると云ふよりも、寧ろ靈に生けると云ふことが本心の願ひではないでせうか。一時の肉慾や財慾、若くは一時の名譽に捕はれて永くもない一生を夢の間に無くしてしまふことは少しく考へある人々の到底忍び得ない所であります。

然るにこの世の人々を見るに、世間の多くは實に靈に生ける人々が少くして、肉にのみ生きやうとさせてゐます。然し乍ら靜かに人生の一生を考察すれば誰か永遠に死ななくして、今日まで生きてゐた人があります。若し之を生物學的に云ふならば人生の一生は

四

己の生活何たる我儘の自分で有る事を更に深く耽ちました道友の皆様と語り合ふて、更に御上人様に合掌して如來サマを知らしめて頂き度きを切願致しました奮ハンミしても、安協生活にのみ腰掛ける自己の淺ましさに呆れ乍らも去年の今日を思ひ此の頃の營業を見徒弟を見る上に愛兒を見る上に可なり之感の違ふ事を思ふ時に身の仕合を歎び總てを無くして合掌の出来る事を悦び候其悦びは直に活動の元氣となりて自分を圓る家庭の人々と共に笑みの内に營業に一心する今日の幸福に感謝致し候。年内より長男は癪を惱み大分心配致し引續いて家内は面テフの爲めに恐い目に會ひ未だ全快に至りませう候へ共然も營業非常の多忙にて全く寸暇無ククル／＼舞ひの中に居り乍らも常に御念佛を絶たす心安らかに最善の方法を盡しつゝ、行く事の出来る御慈悲を悦び候之れが信仰を頂かぬ以前ならば如何にヤキ／＼苦しむ事かと願ひてそぞろ恐ろしさを覺へ候、家内もおぼさん共々一心に勵し合ひ悦び居り候、二月の待遠しく頼りに待たれ候、ドウツ御手紙の折御上人様によろしく申上げ被下度御願申上候。

一月五日

口越後柏崎 原吉郎様より

私も御蔭をもちまして昨年來餘程健康を回復致しました少しづつ、社會的にも關係が多くなり夫れ丈緊張して應分の報恩が出来ますので喜んで居ります。只御念佛が未だ底不十分でありますから今年は大々的發憤して若い人々に取けずして勵む積りであります。當地方道友諸君は何れも非常に熱心であります、只遺憾なるは中心人物のなき事であります。

來る二月中旬頃一週間位是非御都合願ひます道友諸君一同が非常に御慕ひ申して居られます今年には各自の信仰を深めるべく精進にする事は勿論でありますが猶ほ他面教線の擴張にも大に務め度決心であります。御上人様さい時々御都合下さいませれば必ず偉大の效果あるべきは火を睹るよりも明の事であります。眞光寺の例日は去十一月以來毎月一日、十一日、十七日、二十一日の四日でありましたが猶ほ其間少くも一、二回は臨時の集會があります。箕輪、中村、近藤(村役場の人々)の三君主他にて本村十王堂に於て毎月十五日夜例會があります。中々多數の會合者が御座います又今春四五五月の頃には佐藤益章、矢代、岡村の諸君の發起にて南鑄石郷にも支部が出来

唯つかのまでありまふ。そして生理學的意味ならば誰一人として、眞に永生の人々にてはありません。而して此の意味に於て如何に多くの人々がたゞい永生の道を求めて、不死の努力をしましても、肉體としての人の一生は必ず死の時が来るに相違ありません。尤も此の意味に於て十字架にかゝつたキリストがキリストを十字架にかけた人々よりも早く死んだと云ふことは事實です。然し乍ら其の後二千年を経た今日から之を見ますれば其の死は二者共に同じであります。即ち今や二者共に死に去つて其の肉體は此の世に存在してゐるのではなくありません。而も其の實に於て何れが眞に大業を爲したでありませう。而も其の後に於て、キリストの御名は益々後世に光りを放ち、幾多の人の心に歌はれ、幾多の人の心を濟つて居るのに反し、キリストを十字架にかけた人々の名は其の蔭さへも今や見るこゝろがでぬのであります。

眞生の道

世に身を殺して仁を爲す云ふことは即ちこのことを云ふのでありませう。而して身を殺す云ふことは其の實其の内容を深く反省しますれば決して其の身を殺すものではなくしてむしろ其の身を有効に生かすことであつたのであります。何と云へば身を殺す云ふことは仁を爲すが爲めであつて、此の身を道の爲めに意義あらしむることであるからであります。凡そ人の身は長くても百年を保たず、而も今日にも知れぬ命であります。そしてそれがよし幸ひにして永生をしましても、人はいつかは死すべきものの、否之を厳

密に云ふならば凡そ如何なる時、如何なる場合と雖も、其の人の壽命は一生を通じて刻々に過ぎつゝあるものでありまして、言はば吾人の生命は其の日に刻々として死に近づきつゝあるのであります。否、むしろ、刻々に死につゝあると申しても、決して過言ではないのであります。然らば凡そ此身を眞に生かす云ふことはたゞ偏に此の身をして眞に價値ある生活の上にあらしむることより外に之を救ふの道はないのでありませう。されば此の意味に於て身を殺して仁を爲す云ふことは其の實、眞に自らを價値の爲めに生かすことである云ふはねばなりませぬ。然らば普通肉慾に捕はれた人々の人生は其の實却つて肉にも生きて行くの道ではなくして、却つてその肉をも殺してある云ふことになるのであります。所謂肉慾に捕はれた多くの人は肉の爲めに返つて死ぬのでありまして身心共に滅亡の淵に沈むのであります。茲に於て肉に死して眞に生きる云ふことのみが眞に自らを生かすの道でありましてそれがまた肉をも眞に生かす云ふことになるのであります。然らば眞に自らを愛するものは如何にか其の身を殺して仁を爲す云ふ事を好まぬものがありませう。言換へれば身を殺すとは即ち自己を生かすの道であつたのであります。此の意味に於て眞人の生活はいつても獸身の生活でありまして、肉の爲めに捕はれたる生活ではないのであります。凡そ生さし生けるもの誰か生き涯ある人生を望まないものがありませう。而して生き涯ある人生は要するに生き涯ある働きの生活そのものでなくてはなりません。されば人は生き涯ある働きの爲めとして、生き涯ある人生の人々を成ることはできますまい。然らば生き涯ある人生は要するに價値の生活、道の爲めの人生、言換へ

答であります。

□清水市 松永光子様より

御上人様諒闇の春も早や七日経ました、今年は何となくしめやかなお正月で御座いました、永い間御無沙汰いたしました、何卒御許し下さいませ、去年の御別時以來一年は夢の間にすぎました、その間私としては可成奮戦をいたした積りで御座いますが……併し心の悩みは絶へず私の身を離れた事は御座いません。煩惱多き私故動める心の重なる程悩みはます許りで御座います、私の信仰は何時しか向上の一路、如何に生くべきかの苦しみに向つてゐます、彼岸は遠く我身は拙し、どうして如來の御力によらずして聖旨をあらはすことができません、そこにこそ南無の一念は私の本心から叫び出されます。清水の御別時も間近になりました、心待ちに待たれます

□神戸高商佛教青年會より

謹啓、寒氣愈々厳しく相成候處、先生益々御健勝奉大賀候、陳者去十九日夜は御多忙中にも拘わらず、本會の爲めに御來演下され、有益且御懇切なる御説話を拜聴仕り眞に有難く厚く御禮申上げ候、先生の御講演は、たして小生等の間に少からぬセンセイションを生じ

閉會後夜更くる迄相語り、是非先生第二回の御講演の榮を給はらんことを希待して解散仕候今後共に何分の御指導を賜り度く伏して懇願仕り候、右御禮申上度く如斯御座候 敬具

□伊勢 谷口年泰様より

之まで旅行きらひでゐました母が大層喜んで歸りまして私共も亦一入喜びに満ちて迎へました、(大正八年父の病氣にかゝりました年)以來何時かは来るであらうと待ちに待つた、「人生の春」が来たんだとしみじみ感じました實に恩寵のきわみでございます、先は御見舞旁々御禮申上げます。

□小川奈美子様より

故郷よりもおなつかしき御尊家皆様に御目にかゝり途々長座いたしている(と御厄介になつたり御馳走様になりました、清水の御別時のありがた御土産話によつて自分も参加したやう気分になりました、皆様の御精進なさる御様子に自分もどうしても勵まざるを得ないのでございます、時々お宅の空気にひたるのが何より嬉しいこと、よろこんで居ります、かうして毎日働いて居りますと仲々修養さう特別な時間をさる事は出来ません、併し一面現在の此の生活の中にも又得る點も

れば、戯身の生活、これほど大なる人生の眞義はないのであります。而してそれがまた、眞に自分が永久に天地と共に生きるの道でもあるのであります。

私達が一般に死にたくないと言ふことも之を證すれば自分自身をして最も生涯ある人生を送らしめんが爲めであります。だからまさかの時には生命をも惜まぬのが返つて一般生物に於ける常であります。だから私達の本心は之こそ道である、之こそ眞であるを深く自ら信ずることならば自己の生命を惜むものではありませんやそこらかむしろ此の生命を屠することこそ喜ぶものであります。而してそれが又眞の人生の大道であり、眞に永生の道であるのであります。キリストの十字架の如き正にその證據であると言ふべきです。

無駄なき生活

山口常照

今は念佛も向上して以前通りではないかも知れないが、九州に私の先輩としての知人がある、此の人が嘗て

『念佛したつてつまらない、それよりも其の時間だけ本の十頁も讀んだが得た』

と言はれた事を思ひ出す、今にも僧正様になれる人であるが大切なお念佛がその時まではまだお解りになつて居られない、そのくせ法然上人の法語の解釋や、念佛の説明なんかさせたらそれは系統的に圖解までして、筆に口にいまいものである、念佛の話はするが念

佛申すのはつまらない、それより本を讀んだがよいといふ、要するにお稱名に救ひの力を見出して居られないのだ、救ひの力を見出さないからつまらなくなる、蓋しそは觀念の念佛に過ぎないからだ、さうして我々は觀念の念佛で救はれよう、念佛日當ての念佛、念々毎に往生の業となる充實せる念佛によつて、初めて救ひを體驗する此の體驗を味はふもの念佛申すはつまらんな言つては居れない筈である。

法然上人の法語に

『又一念を不定に思ふは念々の念佛に、不信の念佛になるなり、その故に阿彌陀佛は一念に一度の往生をあておき給へる願なれば念々に往生の業となるなり』

と、上人の如き充實せる生活者にして、初めて本願をかく讀み破り得るのである、念ごとに往生の業となるなりと聞きし時、念ごとに救ひを體驗すべきである、念佛唱へたる結果救はれるに非ずして念佛唱へるそのまゝに救ひはあるのだ、念佛を救ひの方便として申すに非ず念佛そのまゝが目的にして救ひである之を因果同時の救ひといふ此の念佛にして初めて充實せる念佛といふべきである、然るに此の意を悟らずして唱へたる結果に於て救はるる救ひの結果に於て求め、又計算的に救ひを求むる念佛者がある、然しその念佛は空虚の念佛、『不信の念佛になるなり』

嘗て或地方にて光明會の別時念佛會に參加せし一求道者が『一週間念佛したが何等得る處なかりき』と告白したといふ、恐らく此の求道者は計算的に、結果本位に救ひを求めた

多いこと、思はれ日々元氣にたのしく眞實に生きるべく心掛けつゝ暮さうと思ひます、どうぞ此後ともよろしくお導き下さいませ、末ながらお上人様にもよろしくお傳へ下さい美智子様御大切に皆様もどうぞ御身御大切に祈上ます。
(東京小石川)

大阪市 奥村善次郎様より

さて最近如來様の御試練が小生に給はつたのです。本月十七日御上人御來阪の時に大阪高等商業學校にて御講演を御願して置きましたそれにつきまして小生の同期卒業の尾形教授に色々とお世話願つて置きました處幕の廿日に學校の方より電話で今回大阪高商に佛教青年會を新に作り度いさの事でした。それで小生學校の方へ参りました先輩の岡崎教授に會ひました處玉木教授(教頭洋行中で主席教授學生監)は岡崎教授に佛教青年會設立に努力してくれさの話で眞に實踐的に然も吾々の依るべき道は宗教より外ないと言つて居られまので學校としても學生自身の爲にも非常に更生し得る事であるから是非岡崎氏に設立してくれ自分は校務の爲非常に多忙であるから自分に代つてやつてくれさの事でした。そして根強い處の單なる既成宗教にさらばれ

すにキリスト教と佛教との兩相傳つて學生に信仰を芽ばへさしたいと言つて居られました。それで私も誠に喜ばしい事ですから早速尾形教授にお願いした講演を今度の出来る佛教青年會の方で主催してもらつて創立總會と共にしてもらふ事としまして吾々大阪の眞生同盟の諸兄と共に力ぞえをして下さる事を約して置きました。それで小生も及ばずながら道の爲如來様の私への試みに大に努力して會の爲母校の爲めに大につきし度いさ存じまして着々と其計畫を進めて居ります。眞生運動の日増しに隆盛となつて來ます事を思ひますれば吾々の責任の重大である事を感ぜまして如來の慈光の如何に偉大なるかを感ぜずには居られせん。小生先月より法然上人淨土宗略抄を現代文に釋譯して吾々の道によつて註譯を加へまして着々と暇に書いて居ります。何れ出來上つた上お目に掛けますから訂正を願ひ度いと思つて居ります、眞生誌なり光明誌に連載させていたゞかう思つてゐます。一月元日より長圓寺の三木上人と野田兄弓場さんはお別時を修行してゐられます小生も一日二日參加させていたゞきました野田兄の如き泊り掛まで行かれました。三木上人の御信

のではないかと思へる。知るべし、今の一念がアルファであり、オメガである。又全部であり永遠でもある。一念に一度の往生！、刻々の成就即永遠の成就今の一念に於ける自己完成が永遠の自己完成なるを！！

夏目漱石さんが「我輩は猫である」の中に、

「表裏のある人間は日記でも書いて世に出されぬ自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが我等猫圖に至るに居住座臥行尿送尿悉く眞實の日記である」
と何たるユーモアに富んだ皮肉であらう、充實せる生活の人格者にして言へる言葉だと思ふ、文藝者としての彼も生活の充實をにらんで居たのだ、居住座臥眞實の日記である、少しも生活の無駄が見出されない。

「ニューヨークの公園にある年虫がわいて、殆んど木を枯れ木の様にしてしまつた、そこで市民は此の虫退治の方法を講じた結果、雀を飼つたら雀が虫を食ふ事によりて目的を達し得ようといふのである、果せる哉雀は、食物は澤山だしさんく繁殖して、其の結果豫想通り虫退治が出来た、然し今度は逆にあまりに雀が繁殖し過ぎて、雀の食物が不足する様になり、今まで肥れて居た雀が營養不養でロクに飛ぶ事も出来ない様にまでなつて、道路などにもバタン／＼やつて居た、之を目撃した可憐なる一少女は、恰もクリスマスの日之等の雀を助けたいと思つてお母さんに食物をおねだりして、クリスマスの夕方クリスマス

マストリーに食物籠を吊さけて、窓ぎはから差し出して雀の來て食ふのを待つて居た、しばらくすると二三羽の雀がこんで來て、いさもおかしさに、喜んで食て居た、之を見た少女は、カーチャン／＼來て御覽、雀が食てるよ／＼と手を打つて喜びました」

これは中學で習ふ英語讀本の中にある、スバロース、クリスマスツリーといふお伽噺であります。噺は「喜びました」でブツリと切れて後でその少女は神さまから褒美もらつたさ何とも書いてない打算的に教育された子供は「何だつまらないな」といふが、此の噺の興味は茲にある日本の舌切雀のお伽噺と對照して考へるご教はるごころが確にある。

善果を得る爲めに善因を修するといふ事は打算的であつて行爲の上々なるものではない善因を修する其のまゝ善果たり、因果同時の此の行爲こそ上々たるものである。

何となれば善因即ち善果を信する人々は徒勞の感じがなく、常に喜びと満足がある、之に反して善因の功德によりて結果として善果を求めて居る時、善果の與へられない場合（豫想は往々にして裏切られる場合が多い）徒勞を感じ、未練・愚痴・失望・又失望！となる、我々は若し此の失望から救はれたくば、念佛でも、業務でも、育児でも、彼のツツラを得る事に満足求めず、カーチャン／＼雀が食てる／＼と手を打つて喜ぶ處に満足を見出した、打算をさび越して……………

即ち恩給を得る處に満足求めず、今の一舉手一投足の中に満足を見出して働きたい、これでこそ充實生活である。

仰の如何に進んでゐられるかを知りますに、つけ私共の様な凡人でも如來様は見すてすに活かし下さるかを思ふ時涙たらずにはゐられません。以上最近況通知を以て新年の辭に代へます。 一月四日

□越後見附 今井善吉様より

念佛行者の生きたる本章は自ら稱ふる名號に在ますこのゆへに行住坐臥に本章を離れぬ。ほんごに寝ても起きても常に如來を憶念し奉り一生涯ブチ通して念佛一行になりたしとして其餘佛行がビツタリと日常生活の最高理想の實行者となりたし心の底からワク／＼ここみ上げて参ります信行一致した眞美善の實行生活でなくては私として如何とも心中の満足が、出来ません御上人の如く一日も早く自己本心の最高に生きたいと存じます。信仰に徹するに非ずんば自己事業の大なる成功は勝得られませぬ。あゝ、本當に念佛にブチ通したい専心念佛にひたり三昧發得者ぞ成り自利々他の最高理想を生命を賭しても叫ばずには居れんさ云ふ御上人の様な境地に一日も早く達したい。あゝ、其爲めなら生命も惜しくはありません財産も必要は有りませんそれには念佛別時の外ありませんと思ふ時御上人のおそば

に馳せ参じ御上人の御徳に接したいと山々思ひますけれども清水の御別時には参加出来ませんで残念でなりません。二月には御會することを一日も千秋の思ひで、御待ちして居ります

□尼ヶ崎 内藤慎一郎様より

拜啓今回當校佛教青年會講演會については御多忙中にも不拘我青年のため有譽なる御講演被成下有難奉謝候、殊に夜間吹きし折柄一層恐入候、當地は設備萬端行き届き不申先生に對し種々御無禮の段何卒御許被下度候、當夜の御講演は我々に多大の感銘を與え閉會後同志相集り種々意見相戦しなり候次第に御座候。右年遅延御禮まで如斯御座候。尙年末筆當日は老父病臥の處陋屋にわざ／＼御見舞被下有難奉存候、種々御高説に接し老父大に嬉び申居候、病臥の事まで御禮状も認め不得自分より宜しく傳えくれよと申居候。右父に代り乍失禮御禮申上候。 敬具

□沼津市 辻つや子様より

亂筆御免下さいませ、先般お別時には、おなつかしき奥様にばじめて、お目にかゝり色々お世話話様御教導に預りましてありがたうございました。いつも御手紙を頂きまして一度

「日にあらた日々あらたに改めん

断ぬぬ光に照らさるゝ身は」

さういふのである、断ぬぬ光とは、宇宙創造の生命をいふ、生命は不斷に進轉して居る、不可説轉の轉として活躍して居る、宇宙は此の生命の刹那の表現である、決して神によりて一度創造せられて固定して居るものではない神は念々刹那に宇宙を創造して居るを見るべきである、さればキリストも

「我父は今に至るまで働き給ふ、我も亦働くなり」

と人格的に暖かく表現して居る、釋迦は、

「今現に在して説法し給ふ」といふ。

我々は此の不斷の光に照らされて生かざるゝ身である。

それ生命は日に新日々に新に宇宙を創造して止む時がない、されば我々も此の生命に合致して生命と共に日に新、日々に新に改めて行かうといふのであらう、茲に生の本義がある、何となれば日に新、日々に新に宇宙創造の一部を荷負ふものであるからである。

辨樂上人も亦不可説轉の轉としての不斷の光明を體驗して此の充實せる無厭なき生活を現はされたのである。

□

嘗て畏友森脇君が淨朋紙上にて、往生極樂の爲の念佛か？念佛の爲の念佛かを論じた事

がある、

「他人の事は分らないとして私だけはお念佛日當にお念佛を申して居るのです、お念佛目當にお念佛申す様に努力して居るのです」と、彼も亦一念に一度の往生をあておき給へる願なればの眞意を體驗して居る、念佛が手段に非ずして目的として申される處に充實の念佛となり、救ひとなる、救ひ此の充實生活を離れてはあり得ないのだ、

彼も論ぜる如く往生極樂の手段としての念佛であるならば往生してしまつたら用事のないもの、往生と共に念佛も自殺である又萬一折角申して居たが往生が出来なかつたといふ結果となつたならば、誠に徒勞の念佛となつてしまふ、骨折損のくたびれ儲け、念佛申してもつまらない、本の十頁もといふ感じは茲に生れる一生を無厭念佛で過ごした事になる、之では全く絶望の外はない。

然らば一枚起請文の

「たゞ往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して往生するぞと思ひこりて申す外には別の仔細候はず」といふ事は不徹底として否定すべきであらうか？私の體驗より之を觀れば、

往生極樂の爲の念佛！

念佛の爲の念佛！

結局は言葉に於ける表現の相違であつて體驗の上からは一味ではないでせうか、何となれば往生するといふ事は、無限の時空を越えて宇宙唯一の主體たる獨尊の世界に生きる事である、更に言へば獨尊を中心に價値の世界を現實に體現する事である、その體現の要求が

御目にかゝりたく居りましたら今度幸ひに希望も叶ひ今迄より一層光明を得た様な力を得た様な感に打たれました。ほんとうに愚かものにていつ迄もたちましても一つ所か或は下つた様に思はれてなりません、私等……どうぞ、今後共御手引下さいます様くれぐれもお願ひ申ます、その内一度上京御邪魔として頂きますのを今より何よりのたのしみにいたして居ります。御上人様御奥様御不在にて御子様方定めしお淋しくてゐらせられた事とお察し申ます。御上人様御歸宅遊ばされましたらどうぞ宜敷御申傳へ下さいませ。

先は御禮まで。一月廿日 御奥様

□仁川 山口常照様

先頃はまた御親切なる御手紙頂きまして誠に有り難う御座いました、偕て眞生の新年號の「獅子の子さ羊の群」非常な力を與へられましたもう人を頼つたり、假空的な概念の佛にすがつて居る時代ではないのです、ほんとに獨り立ちすべき時代です、先頃三月號の眞生の原稿とも思ひまして「不死の自覺の第三期」といふ一篇をお送りいたしました、私も漸く不死の自覺の第三期を味はう様になりました、私は第三期に入つて精神も肉體も共に整ひ参り

まして希望も力に満されて居ります今迄幾度か立ち上らうとしましたがどうも腰がふらついて立ち上れませんでした、漸く立ち上る力が出て参りました、獅子の子が羊の群を脱して本然の自己の叫びを擧げる時代だとの上人の御激勵！奮ひ立たすには居れなかつた同時に自己の責任を痛感いたしましたそこへ未だうら若き新帝陛下の御勅語を拜し奉たるさきじつとして居れなくなり茲に細々乍ら

「仁川眞生同盟」

が産聲を擧げました、第一巻の創刊號が御手許に届いた筈です誠に貧弱なものです、然し上人よ！、此の子の生れる迄随分長い惱みでした、大正三年初めて上人に御目にかゝり私の家を啓いて頂いた、その時が此の子供の入胎でした、その後今日迄長養聖胎の修練を経て漸く世に出ました、上人！生れた此の子は誠に貧弱ですが又誠に可愛いものです此の後素直に此の子の成長せん事をたゞ念願して居ります、何卒上人！此の子を可愛がり激勵してやつて下さいませ、思へば満蒙に發展せざれば生きられない、日本民族の將來！鮮土に此の子の初聲を擧げた事には深甚の使命が更に感ぜられます。上人よ！今私どもの心は感

進りて南無阿彌陀佛のお稱名なる、最初は稱名を手段として申したのであるが、後には稱名念佛そのまゝが求むる理想境で、念佛に絶対の満足を得る様になる、然らば極樂往生は即ち念佛往生である、極樂目當の念佛は念佛目當の念佛となる、此の念佛にして初めて無限の念佛と云ひ得る故に表現の相違であつて體驗の上からは一味である、故に念佛の爲の念佛と云つても祖師の心地に反しはせんと思ふ、寧ろ念佛の爲の念佛と無礙なき充實の念佛となつた事を祖師も念佛の遺跡の中から微笑んで居らるゝ事と思ふ。

□

斷つ間なく念佛申す事が、絶つ間なく働く事が充實生活と考へて居た時もある、然し念佛申す刹那、仕事する刹那、その刹那が念佛の理想仕事の目的にして其刹那に生きる喜びと満足を見出して働くといふ内容が缺けて居ては、一生涯、念佛し、絶つ間なく働いても充實せる生活とは言はれない、それは徒なる多忙の生活に過ぎない、空虚なる生活に過ぎない、何となれば今の刹那に喜びと満足なく、結果を彼方の世界に置いて居るからである、かゝる多忙の生活者、結果の爲に働いて居るものは從容として死ねない。たゞ充實せる生活者のみ死を越えて、今死んでも悔はないのだ。我々はいつ死んでも悔ない生活をしたいものである。

茲に於て又佛道の達人芭蕉翁を憶ふ、

芭蕉臨終に當りて、その門弟が辭世の句を請ふた、するに翁は

「余の辭世の句は今日まで詠んで来た一句一句が悉く辭世であつた」

と言つたと言ふ事である、一句一句が悉く辭世、あゝ彼も亦充實生活の同行であつた、一句一句に駄作はない筈だ、出来不出来はしても皆魂がこもつて居る、眞實な生活だ、かくてこそ今死んでも悔はない。

更に法然上人を憶ふ、

「人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり、南無阿彌陀佛さかみて、南無阿彌陀佛さのみ入べきなり」

「阿彌陀佛三十聲唱へてまごころまん

ながきねむりになりもこそせむ」

食ふ事に寝る事に二太刀も打ち込めない、寸隙もない生活がうかゞはれる、世人はかゝる生活を死におびやかされた不安な生活ではないかといふかも知れないが、若しもいつ死ぬか解らんからと懸念し、又死にはせんかと恐れての念佛ならばそれは戦々惴々たる不安であるが芭蕉や法然上人の態度はそうではない、いつ死んでも悔ない様に生命の句を残す、いつ死んでも悔ない様に生命の念佛を申すのです、即ち生命の念佛を申すからには、食事にむせて死んでも、眠つた儘深き眠りに落ちてても更に悔ない眞の落ち着きが出来る、此の落着いた生活を餘裕ある生活といふ。

現代文化に誠に外側にのみ氣を奪はれて、内側を見る餘裕がない、オツテヨコチヨイの行き當りばつたりの生活が多い、落着きや餘裕は更らない、此の如き生活では誠に現在及び將來の難局をどうして切り抜けて行くのたうと案ぜられる、現代はよろしく餘裕を養ふべき時代である。

激の光に満されて居ります、何卒御よろこび下さい
就ては「眞生」二月號から五十部御送り下さいませんか御願いたします。
一月廿日

一味 (月刊パンフレット)

一つの大地によつて色取々の花が咲かされるやうに、一つの如來さまのお心に孕まれて色取々の信仰が榮えます。而し一味への還元であり、一味よりの來生であります。この意味での私達の體驗の綴り合せです。御望みの方へは差上ります。(中野尅子)

申込所 愛知縣海部郡津島町一味會

東京 市川宅茂様より

皆様御達者で眞生運動の爲御精進の程感謝の至りであります。いつもお恵みに、あづかる「眞生」によつて私も全く心機一轉眞實生命を戀ひその生きる道の示されたことの有難さとして一切が感謝と變つて、自分の世界が明るく廣くなつた様な氣がします。これもみんな先生のお蔭と有難く心から感謝して居ります

観道 日程

二月八日夜行東京發、越後柏崎直行
同九日より十五日まで柏崎及見附
同十六日夜大阪府南船屋町豐田氏邸
同十七日晝未定、夜大阪府北市民館
同十八日晝未定、夜尼ヶ崎市大物圓寺
同十九日神戸市
同二十日晝名古屋崇徳寺、夜同梅香院
同二十一日朝及晝、同西區千歳町崇徳寺
同二十、二、三、四日愛知縣西加茂郡高橋村
澁川、性源寺
同二十五日名古屋
同二十六七日三重縣小杉、服部氏方
同二十八日四日市
三月一、二、三日三重縣五味塚榮照寺
同四、五、六日三河縣母土橋法雲寺
同七日夜靜岡縣燒津光心寺
同八日清水實相寺
同九日歸京

編輯部より 觀道

○大正十二年の二月に眞生が生まれましてからもう九年と一ヶ月になります。足かけ六年の年月日は短いやうでも長いものです。而も此の眞生が生まれるには生れんとして生れることのできない悩みが可なりにも永くつゞきました。それについては第一かうした信仰中心の雑誌が多くの人々に果して讀んで貰うるかどうか、またそれに對する資金が續くかどうかとも可なりにも考へさせられた問題でありました。而も當時は毎月一千部づつを發行しましたが、此の代價六十七八圓から七十五圓を要し、それに一々の郵税と發送費を支拂ひますので毎月可なりに入費であつたのであります。而も此の間に誌代をくれる人云つたら讀者の三分の一もありませず、之ではとても立行かないではないかと思へましたがそれでも、出来るだけは全力を盡してつづけ

たいに努力したしたのであります。此の間の消息を能く知つて頂いた道友からは時々過分の寄贈に預り、遂に今日まで持續することができましたことは全く此の上も無い喜びであります。其後讀者も追々増加し、今日では已に千三四百部を發行するやうになりました。而も時々熱心な讀者からは近頃創刊號からまゝ置きたいからなご申して全部のこりそろへを申し込んで来る人さへ多くなつて來ましたことは私共編輯部員の最光榮とするところであります。普通の雑誌はたいてい一度讀みで捨てられるのが常であります。然るに私共この眞生がかくも多くの人々によつて、創刊號から改めてこりよせられること云ふことはむしろ同人の感謝するところであつて又今後とも更に一層の編輯甲斐のあることを喜びに堪へぬ次第であります。

なるのが常ださうで、三年以上も讀者を持ち得れば其の後の經營は可なりに永續性を持ちうるこのことですから、或はこの分ならば此の眞生もきつと今後も永續すること喜んでゐます。

○然し乍ら若しできるものならば是非とも讀者だけの誌代によつて、經濟的獨立だけは得たいものと思ひます。この讀者の中に一ケ年に一圓位の誌代の拂へないほどの金に困つた方もないことと思ひます。若し未拂の人々によつて、右の誌代を拂ひ込んでくだされば印刷だけの實費の獨立は持つことが出来るのですから、願はくは誌代未拂の方々は誌代を御拂下さいませうに願ひます。

○今度、可べく多くの讀者の便宜さとなり又若しできることならば更に多くの讀者をも一般に得て、多くの人々に眞生の眞義に共鳴して頂きたいために、ルビーを附けること

にいたしました。之は相當の費用も更に加さむこととありますがそれ位のことは讀者の増すことと、私共道友の力によつて、きつと維持せられることと存じます。

○向この眞生は博く眞生の主義に共鳴した道友の原稿を歓迎しますから、奮つて有志の御投稿を願ひます。其他各地の近況も御知らせに預りますならは何よりのこととあります。○最近の私は昨年の八九月頃と比べては餘程の健康になりました。當時あまりに體を使ひ過た私は可なりにも身心に疲勞を來して、この分では行末が案じられましたが、其の後の注意によつて、運動の不足を補つた爲めか其の後大いに健康も回復しました。私の一家は今日のところ家内も近來にない健康を晴々とした氣分で道の爲めに働いてくれますし、子供の方も至つて丈夫で日夜私共を喜ばせてくれてゐますから、他事乍ら道友の御安意を

願ひます。

○次に各地の眞生同盟は已にまじ道友の増加となり、此の勢ひで進むならば全國に渡つて我が道友の一大勢力となることは火を見るよりも明かであります。然し乍ら之もひとへに如來の大慈悲我が道友の限りなき範圍の然しむるところ、殊に最近各種專門學校及び大學内に此の運動の著るしくなつて來ましたことは、吾々の一大喜びであります。其の他、各地の道友が何れも有識階級に青年實業家の間に實際生活の源泉として信仰せられつゝあることは更に一層の喜びであること云はねばなりません。然し乍ら未だ之を我が七千萬人の同胞に比べ、更に十五億の世界の住民に比べれば今日の道友は尙前途遠大なものがありませう。これまじく我道友の更に一層の奮闘を要することと存じます。

○それにつけても、我が道友の方々よ、私はかうして一々に筆をこころが、そのまゝ、千有四百の我が讀者に一々に相語る喜びを諸君に對して感謝の氣もちであることを許して

下さい。永々御便りもせず、また中には久しく御便りも受けず、又まきには未だ一面識も無い讀者の方も数多いこととありますが私の心の中にはさうした一切の讀者その人にも、已に千古の知己として、その動靜を拜察させて頂いてゐるのであります。否それどころか私がかうして筆をこころまゝか、やがて幾年かの後、私共が此の世を辭した幾千年の後に於て、此の世に生れて來た道友の人々にも此の眞生が讀まれる時があるかと思へば私はさうした人々に對しても無限のなつかしさを感じさせて頂きます。まして、一度でも私の心に止まり、又一日でも共に道を語つた道友の方々に對しては私は永久にかうして御慕ひして止まぬものがあることを許して下さい。私はかうして皆さんを永久にお慕ひするを此上もない光榮と喜んでゐます。もう今晚もよほさぬようになりました。寒さも一しは身にしみて覺えます。それにつけても皆様ようぞ御體を大切にして下さい。くれぐれも皆様の御健康を御祈りして止みません。

◎眞生同盟會清水支部眞生修養會結集芳名

去る一月の清水實相寺での修養會は、近來にない眞劍な道友の集會でありました。集つた人々も主として青年有識の人々を中心として、其の講演の内容も社會活動の源泉としての宗教問題でありました。尙その講話の前後に於て、光明禮儀及び靜座並に時々國民體操を入れて、聽講道友の氣分を新にした點に於ては最も新し試みとして、一層の活動の氣分を十分に養ふ糧となりました。其の集會者の住所と氏名を記念として掲げますれば、

高松市丸龜町四四	政木 守之
新湯縣柏崎町	原 吉郎
同町	渡邊八右衛門
同	岩下 祥兒
愛知縣海部郡佐屋村	黒宮 孝壽
名古屋西區千歲町崇徳寺	淺野 孝眼
同市中區御器所町鳥喰	伊藤 留吉
同市同町布池	尾上 銀子
靜岡縣沼津市淺間町	安藤壽喜治
同所	戸谷幸吉、辻つや子、辻つゆ子、
安藤信吉、大橋喜代三、	
同縣志太郡燒津町	天野 源一
北山忍良、片山さき子、齋藤才次郎	
寺岡幸三郎、前田甚一郎	
靜岡縣札之辻町	栗生 來治
同清水鎮三	櫻井 操
同市美聲堂内	瀬路福太郎
清水市本魚町	中村 辨康
青木福松、八木新作、山本てる	
同下清水福嚴寺	友松 覺眞
同入江町法岸寺	鶴岡 義孝
同市清水入江受新田	鈴木 與平
同	鈴木 まさ
同市美濃輪	松下勝太郎
同市上町三三〇	森 藤作
同市本町三三〇	風間 徳郎
同	宮原 徳郎
同市清水受新田	宮原 徳郎
同市中町	松永みつ子
大河さよ、櫻田 らい	

同市入江町 兼岩 靜枝
同市波止場 窪澤 いれ
同 木口さく、良智 ふみ
同市清水入江受新田
久我尾正治、久我尾春子、松永兼吉
佐々木清志、佐々木初子、天野いく
遠藤やす、
同鈴興商店内
村岡祐一、塩津義雄、石川修治、
望月重一郎、船野秀太郎、澤野謙二
志村福次、三浦孝吉、風間義郎、
青木秀太郎、渡邊正雄、登澤幸三、
大瀧長吉、安藤眞佐志、秋鹿貞彦、
山内薫次郎、堀江、足立

この外にも尙一日二日と見えた人もあります
が略します記入落ちの方あらば御一報下さい

定價一冊十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼 發行入 土屋 觀道
名古屋市東區東外堀町二ノ二
印刷人 佐藤 忠義
東京市芝區芝公園第十四號地九番
眞生社

(大正十四年八月十三日) 昭和二年二月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第六卷第二號
(第三種郵便物認可) 昭和二年二月十二日發行